武蔵野日曜聖書講筵

火の子

――テサロニケ後第1章――

１９９２年11月15日
小池辰雄

大人物の欠如　患難との戦い　地に火を投ぜんために　信仰の業　聖霊の子　詩「大人物の欠如」

【テサロニケ後1】

1パウロ、シルワノ、テモテ、書を我らの父なる神および主イエス・キリストに在るテサロニケ人の教会に贈る。2願くは父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と、汝らに在らんことを。

3兄弟よ、われら汝等につきて常に感謝せざるを得ず、これ当然の事なり。そは汝らの信仰おおいに加わり、各自みな互の愛を厚くしたればなり。4然れば我らは汝らが忍べる凡ての迫害と患難との中にありて保ちたる忍耐と信仰とを神の諸教会の間に誇る。5これ神の正しき審判の兆にして汝らが神の国に相応しき者とならん為なり。今その御国のために苦難を受く。6汝らに患難を加うる者に患難をもて報い、患難を受くる汝らに、我らと共に安息をもて報い給うは、神の正しき事なり。7即ち主イエス焔の中にその能力の御使たちと共に天より顕れ、8神を知らぬ者と我らの主イエスの福音に服わぬ者とに報をなし給うとき、9斯る者どもは主の顔と、その能力の栄光とを離れて、限りなき滅亡の刑罰を受くべし。10その時は主おのが聖徒によりて崇められ、凡ての信ずる者（なんじらも我らの証を信じたる者なり）によりて讃められんとて来りたもう日なり。11これに就きて我ら常に汝らのために祈るは、我らの神の汝等をして召に適う者となし、能力をもて汝らの凡ての善に就ける願と信仰の業とを成就さしめ給わんことなり。12これ我らの神および主イエス・キリストの恵みによりて、我らの主イエスの御名の汝らの中に崇められ、又なんじらも彼に在りて崇められん為なり。

●大人物の欠如

なにしろ、日本の政界を見ていると、

「一体、日本には政治があるか」

と思う。本当に情けない国だ。今の若い人たちは憤慨しないのかね。日本には大人物がいない。大人物といえば、西郷南洲です。これは日本の近代史の中で第一人者です。私は南洲の伝記を少し読んで、南洲という人は大変な人だと思った。西郷南洲は大人物の代名詞です。今は全く大人物に欠けている。だから私は、

「大人物の欠如」

という詩を書いた。日本にはもう大人物がいない。それは教育の面で素晴らしい教育者がいないから、根元がそこから来ている。要するに、魂の世界がダメなんだ。

「たましひ」は「魂之霊」、

「魂は霊にむかって之く」

と書く。霊魂というけれども、この霊が神の霊につながる。

近代のキリスト者で第一人者は賀川豊彦です。賀川豊彦はよく読んでください。内村鑑三ではない。

何しろ、日本は一番だらしがない。もうダメだ、これは。今の青年は少し怒らなければダメだ。青年にまた、気力がない。全く情けない国だね、日本は。とにかく、今の政治は、政治なんて言えない。全く情けない。世界のもの笑いではないか。

「総辞職しろ、あんなのは」

と、青年が怒らなければダメだよ。青年が少し運動でも起こさなければ。

我々もしっかりしないとダメです。クリスチャンなんて何をしているか。どうぞ、皆さん、大いに活動的になってください。ただ日曜に来て聞いているだけではダメです。もっと戦闘的にならなくては。キリストは最大の勇者だったんです。とにかく、周囲の人を動かすようにならないと。周りの人にキリスト教を伝えたいと、もし人を集めたら、私は話にいきますから。あなた方も大いに戦闘的になってください。女の人だっていいよ、遠慮は要らない。

今日は、テサロニケ後書第1章です。この前は「光の子」と題したが、今日は「火の子」なんだ。火のないところには光がない。火は光の元なんだ。こんな題で話すのは初めてだ。7節に「焔」という字が出ている。だから、「火の子」にした。

この後書は、前書を書いてから、一か月位してからまた書いた。

●患難との戦い

1パウロ、シルワノ、テモテ、書を我らの父なる神および主イエス・キリストに在るテサロニケ人の教会に贈る。2願くは父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と、汝らに在らんことを。

3兄弟よ、われら汝等につきて常に感謝せざるを得ず、これ当然の事なり。そは汝らの信仰おおいに加わり、各自みな互の愛を厚くしたればなり。

あなた方、互いに愛を厚くしているかい。大いに厚き愛で交わってくださいよ、お互いに。キリスト者というのは静的ではないんだ、動的でなければダメなんだ、活動的でなければ。

4 **然れば我らは汝らが忍べる凡ての迫害と患難（なやみ）との中にありて保ちたる忍耐と信仰とを神の諸教会の間に誇る。**

このごろはキリスト教に迫害がないからダメなんだな、クリスチャンは。創業時代は闘いの世界だから。そして、

「キリストはまた直ぐやって来る」

という、そういう間近の現実でもって、ものを言ってたり書いたりしている。

「もう日本はダメだ」

ということで、大いに怒を、憤りを、憤激を持ってなければダメですよ、

「こんな国は何だ！」

と。内村先生が、

「もう、日本には愛想をつかした。そう言ってくれ」

と遺言の中で言った。藤井先生が、

「日本よ滅びよ！」

なんて言った。

5 **これ神の正しき審判（さばき）の兆（しるし）にして汝らが神の国に相応（ふさわ）しき者とならん為なり。今その御国のために苦難を受く。**

そうです。そういった戦いの中にある。それが

「神の国に相応（ふさわ）しき者」

です。神の国に在る者は、この不信の世の中に対して戦っていかなくては。神なき民主主義なんてものはダメだから、身勝手主義だから。

「何が民主主義か！」

と、戦闘的なクリスチャンになってくださいよ。あなた方は遺（のこ）れる民なんだ。人数は少ないんだ。

「遺れる民が本当の神の選びの民だ。人数が少ないだけ遺れる民なんだ。しっかりしろ」

と、イザヤ書に書いてある。この集会で残っている人は「遺りの民」だ。人数が少なければ少ないほど「選びの民」なんだから。

「二、三人、わが名にありて集まる所に我あり」

という。私は、男でも女でも大いに戦闘的になってもらいたいと思う。クリスチャンがボヤボヤしていたらダメなんだ。

ご婦人の方々は、どうですか、婦人会でも開いて、大いにいろいろ語りあったり、なさったら。男子の方でも。とにかく、動的にならなければダメだな、何でもいいから。

そういう、忍耐と信仰、患難との戦いです。

●地に火を投ぜんために

6汝らに患難を加うる者に患難をもて報い、患難を受くる汝らに、我らと共に安息をもて報い給うは、神の正しき事なり。

「安息」とは、神の国での安息です。もう迫っているんだ。その次の言葉が凄い。

7即ち主イエス焔の中にその能力の御使たちと共に天より顕れ、8神を知らぬ者と我らの主イエスの福音に服わぬ者とに報をなし給うとき、9斯る者どもは主の顔と、その能力の栄光とを離れて、限りなき滅亡の刑罰を受くべし。

今日は、題に「火の子」と書いたのはこの、

「主イエス焔の中にその能力の御使たちと共に天より顕れ」

というところ。この前は題に「光の子」と書いた。火は光の元だから、火がない所には光がない。キリストは何と言ったですか、

「我は地に火を投ぜんために来たれり」

という。火を投ずる。投火する。火事になる。

「本当の火事をするために来たんだ」

と。火は聖霊のことです。聖霊のことを火という。聖霊は或るときは水ともいう。水火。凄いものは、本当の世界は両極を持っている。ヨハネ伝には水に譬えられている所がある。

「泉の如く湧きいでるぞ」

と。聖霊のことです。「火の子」とは「御霊の子」ということです。ルカ伝12章49、50節、

49我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

「聖霊が臨んだら、もう望むものはないんだ」と。

「聖霊の火が点じてない者はキリスト者にあらず」

と、パウロも言っている。その土台は十字架です。十字架の土台に聖霊が臨む。十字架が土台になっていなければダメです。

50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。

十字架のことです。

「十字架のバプテスマを受けてから、自分で自分の血を浴びてから、贖罪の血を浴びてから、それから今度は聖霊を降だす」

ということの大事な言葉です。

51われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反って分争なり。」（ルカ12・49～51）

紛争を通して本当の平安に来る。紛争が目的ではない。

日本の女の方は、旦那が信仰を持たないのが多い。正に「忍耐と信仰をもって」という。どうして、男は頑(かた)くななのかね。奥さんの在り方を見て、

「参った！」

と言わなくては。この素晴らしい世界を拒んでいるのは、本当に馬鹿げた話だよ。

日本の民主主義なんていうものは、日本なんてのは本当にしょうがない国だ。教育界がダメ、政治界がダメ。もぅ、戦いですよ、皆さん。戦ってくださいよ、キリストは絶対に負けませんから。

だから、今日は「火の子」と題した。

「火を投ぜんために来たれり」

と。この火はどんな嵐がきても消えない。聖霊は最大の力を持っている。聖霊の光は、いかなる暗黒も消すわけにいかない。それだけもの凄いものだと、あなた方、聖霊を自覚しているかね。聖霊に替えられるものはひとつもないんだ、どこにも。

とにかく、大人物がいない。私は西郷南洲の伝記を読んで、やっぱり西郷南洲は本当に大人物だと思った。いないよ、南洲の他に大人物は。それから、もう一人は賀川豊彦。西郷南洲と賀川豊彦です。

●信仰の業

7 即ち主イエス焔(ほのお)の中にその能力(ちから)の御使たちと共に天より顕れ、

と、凄いね。

「キリストの再臨はもう間近かだ」

として書いている。一体、新約聖書というのは皆その現実で書いているんだから。今のクリスチャンは間がのびているよな。

「キリストの世界はもの凄いぞ」

と、無理やりに引っ張ってきてもいいくらいだ、「来てみろ」と。

「来たりて見よ」

と。私はますます戦闘的になってきましたから。

賀川さんの直弟子たちは凄い。素晴らしい人たちです。田中芳三(よしぞう)さんの『主はわが牧者――荒野に水をわかせた男、升崎外彦(ますざきとよひこ)の生涯』（１９８２年、待晨堂）は是非お読みなさいよ。素晴らしい本だから。

私はもぅ、この第7節で火がついてしまった。

10 その時は主おのが聖徒によりて崇(あが)められ、凡ての信ずる者（なんじらも我らの証を信じたる者なり）によりて讃(ほ)められんとて来(きた)りたもう日なり。11 これに就きて我ら常に汝らのために祈るは、我らの神の汝等をして召(めし)に適(かな)う者とな

し、能力をもて汝らの凡ての善に就ける願と信仰の業（わざ）とを成就さしめ給わんことなり。12これ我らの神および主イエス・キリストの恵みによりて、我らの主イエスの御名の汝らの中に崇（あが）められ、又なんじらも彼に在りて崇められん為なり。

「信仰の業（わざ）」

という言葉。信仰が業を持たなければ、信仰ではない。働かなければ、作用しなければ。あなた方が日常生活において周囲の人に作用していなければダメなんだ。本当の信仰は働かざるを得ない、業ならざるを得ない、発動せざるを得ない。でなければ、信仰ではないんだ、ジッとしているようなのは。だから、私はしょっちゅう書いている。仰ぐのではダメだ、信じ行ぜよ、信行と。信行一如ということ。

私は破れ器です、ちょっとも整っていない。福音の世界は破れ器でないとダメなんだ、八方破れでないと。東京召団の人たちは、私の意気込みでやってくれよ。私は孤軍奮闘みたいだ、昔からそうなんだ。

「我独りにて酒槽（さかぶね）を踏めり」

というような。だから、南洲だとか、賀川豊彦なんかにぶつかって、大変楽しい。

とにかく、今の日本の政界には人物が一人もいない。教育界にもいない。少しは稀（まれ）にはいますけれども、教育界には。皆さんも、ボヤボヤしてないで、是非大いにやってくださいよ。クリスチャンが火のように燃えていなかったらしょうがないものな。だから、「火の子」なんだ。本当のクリスチャンのことを「火の子」という。「聖霊の子」だから。そして、信行は必ず、業をなす。作用をしている。ドイツ語では

「ヴィルクザーメス・ザイン」

「周囲に作用するところの存在」

という。だから出エジプト記3章の、

「我は在りて在るものなり」

は、私はあんな訳はおもしろくないから、

「我は在りて在らしむる者なり」

と、そういうように訳したのは私一人です。太陽は在ることによって、地球を在らしめているでしょ。そういう在り方が本当の在り方なんだ。力をもって作用する。振動を起こす。皆さん一人ひとりはみんな課題があるんですから、その課題に向かって邁進（まいしん）してくださいよ。誰でもみな使命的存在なんだから。使命がある。

●聖霊の子

テサロニケ後書第1章の中心は7節と11節です。「焔」と「信仰の業」。火の子は「聖霊の子」なんだ。

「火を投ぜんために来たれり」

と。ルカ伝12章49、50節はしっかり胆に銘じてくださいよ。これはキリストの本願だからね。キリストは本願を成就なさった。

パウロがゴタゴタ言っているけれども、その中でどこに中心が、どの節が光っているかということを、ちゃんと見破って読まなければダメですよ、漠然と読んでいたのでは。そして、そういう所はちゃんとラインを引っ張っておく。ただ聖書をきれいにしてたってダメです。私は聖書を分冊にしてしまった。

とにかく、あなた方はみなそれぞれ能動的に動いてください。私の言い方は随分烈しいけれども、本当なんだから仕方がない。

私は聖書を読んでいて、ピカッピカッと光る所がある。そういう所にちゃんとラインを引っ張って、そこを中心にしてグッと読む。あとはどうだっていいんだ。そういう読み方をしないとね。

「この節はどういう意味だ」

なんて、そんなことを詮索しているようなことではない。意味ではないんだ、響きなんだ、力なんだ、光なんだ。他の本を読むにしても、みなそうなんですよ。作者の心の中に入って、ピシャッピシャッとつかむ。それも、なれてくると、本を斜めに読めるようになる。どこが大事か、勘でもって分かってくる。

まぁ、88才にもなって、やっとこんな事を言っているんだからね、あなた方は大いに、はやく悟ってくださいよ。

とにかく、日本には人物がいない。教育者に人物がいないから。クリスチャンなんて言ったって、本当にキリストを受けとっていないから。

言葉が言葉にならなくなってしまったな、今日は。

「初めに言あり」

ではないんだ。

「初めに響きあり」

なんだ。響きの世界だ。音楽の世界だ。

とにかく、私みたいなやつはちょっと居ないんだからね、そのつもりでもって聞いていないと。

●詩「大人物の欠如」

「大人物の欠如」という詩（独和対照、ソネット）は、今度の『エン・クリスト』53号（１９９３年1月冬季号）にのります。

「大人物の欠如」（独和対照）

――　ソネット　――

１９９２年11月1日作

何と速かにまた新年が来たことか！
わが業（わざ）は雑事に幾分さまたげられた。
だが年内に取り返したいと欲っている、
新たに天来の霊感を以て。
リンカンは言った、「われらの政治は永遠に
神のもと、国民の、国民による、国民のためのものたるべし」。
だがわが国の民主主義には神意識が絶えて無い。
今や大人物の存在に全く欠けている。
このような惨めな状況の由来は何か。
それは教育界に宗教的霊的な人物が
非常に尠ないからではないか。
またわが国の教育組織の壁にも由る。
こんな組織の枠の大変革を要する。
これが多くの若者や子供らを害っている。

今の教育制度はとんでもない。あんな入学試験はみんな止めてしまえばいい。
「入りたいやつは入れ」
と、中で鍛えてやる。そういう事にならなければダメなんだ。文部大臣はそれ位の大決断をしなければ。とにかく、人物がいないね、本当に。もう、癪（しゃく）にさわってばかりいるんだ、僕は。勝手にしやがれ、と。段々に書くよりか仕方がない。話ならざる話を終わります。